

【一般部門】第4回京都文学賞 寸評（二次選考を担当した読者選考委員からの選評の抜粋）

目次（タイトル五十音順）	頁
アスラ轟記	1
『祈ぎごとひとつ、いくものふたり』	1
小栗栖の藪、偽りの首	1
顔のない雪だるま	1
きみとルララ、鴨川で	1
京都の大学生	1
京都ボンバーレモン	2
京都ミステリ RUN～殺意の匂い～	2
黒田辰秋 梵の刻	2
虚空華(こくうげ)	2
コバの光	2
今夜、祇園のバーで	2
山紫水明	3
騒音ジャム・セッション	3
その刀の煌めきは	3
高瀬川こいにこい	3
チャイルド・ストーン	3
鶴亀サブレとエイセイボーロ	3
天正初恋物語	4
『西洞院劔』十一代 和泉守兼定 古川清右衛門伝	4
ねむ いね	4
パスティーシュであればこそ	4
百代の庭師	4
不足の正体	4
ブラック・メサイア	5
偏差値 72 の恋	5
僕は君と、嘘の世界に囲まれて。	5
ミッドナイト・ア・ラ・モード	5

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
アスラ轟記	<ul style="list-style-type: none"> <li>○時代考証がしっかりとなされており、西暦780年前後の桓武天皇の時代の政治情勢、風俗、信仰などがリアリティをもって描かれていた。</li> <li>○登場人物が多いが、それぞれ特徴的で分かりやすかった。</li> <li>○考古生物学、歴史学などの知見を生かしながら、重厚かつエンターテインメント性の高い物語に仕上がっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○物語において重要ではない説明や、明らかに脱線した描写が多く見受けられて、読むリズムが阻害される。</li> <li>○語り口は分かりやすいが、あまりに軽薄な表現が多いので、小説の重厚さが失われているのは残念。</li> <li>○ブラッシュアップして、全体の3分の2ほどの長さにした方が良いと思った。</li> </ul>
『折鶴いづつひらくものふたり』	<ul style="list-style-type: none"> <li>○タイトルが良い。印象的で、作品にも合っている。全てを説明しないのに奥深い意味を感じさせるバランスの良さもある。</li> <li>○予想のつかない、謎めいた展開で、グイグイと引き付けられ、息つく暇もなく読んだ。辿り着いたラストにも、確かな感動があった。</li> <li>○花びらの白昼夢や、椿に変わる手のひら、片目のないダルマ、白鷺や鳥の人形など、文章によって鮮やかにイメージが浮かぶモチーフが次々に登場する点が印象的。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○観光地紹介がガイドブックのようで、散漫なイメージを受ける。</li> <li>○全体を通して、京都の名所を巡り、その場で見聞きしたことでほぼ物語が進むので、主人公の心情について理解し、同情しにくくなっている気がする。</li> <li>○文章の拙さが目についた。正しい日本語表現を意識して、書き上げた後は十分に推敲の時間を取って、文章の質を向上させる努力をした方が良い。</li> </ul>
小栗栖の藪、偽りの首	<ul style="list-style-type: none"> <li>○短編ながらも、武士の在り方や忠誠心、当時の階級社会などのテーマが詰まっており、それらが散らかり過ぎることなく読み手が受け取りやすいようにまとめられていたのが良かった。</li> <li>○作右衛門の人物設定がしっかりしていて、主人公の心理面の変化などもきっちりと破綻することなく描かれていた。読後感も良い。</li> <li>○文章表現は過度に飾られたものではなく、平易で読みやすい。時々見せる隠喩表現も上手く機能している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○タイトルはもっとシンプルな方が「読んでみたい」と読者に感じてもらえると思う。今のタイトルでは、すべて説明されてしまっている。</li> <li>○登場人物の心中をもっと掘り下げて描いてほしかった。登場人物の感情面や生い立ち等を深く知ることによって、読者ももっと感情移入しやすいと思う。</li> <li>○時代小説ということを考慮すると、地の文が少し現代的だと感じる部分があった。</li> </ul>
顔のない雪だるま	<ul style="list-style-type: none"> <li>○タイトルがこの小説に相応しいと感じる。</li> <li>○要の登場人物3人が互いに影響を及ぼしながら、テンポよく物語が進んでいた。それぞれの背景が明確に描かれているため、物語に引き込まれた。</li> <li>○雪だるまに作り手の心や手のぬくもりを感じたり、どんな作り手かを想像することはなかなかないので、この作品自体の発想が大変面白く感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○一人ひとりの過去のストーリーの場面が若干長いように感じられる。</li> <li>○作品全体として見た時に、話が散らばりすぎていて、風呂敷を広げすぎという感じを受けた。</li> <li>○一つ一つの動作、状況を文字にしていってところをもっと少し省いたり、濁したり、読者に想像させるようにしても良いのではないかな。</li> </ul>
きみとルララ、鴨川で	<ul style="list-style-type: none"> <li>○誰かの「役に立つ」ということの喜びや満足感、自己肯定感、あるいはそれらが引き寄せてしまう悲劇というものがテーマの一つであったことは伝わってきた。</li> <li>○単なる相互補完という同居人の関係から、お互いを個の人間として意識していく男女の感情の変化を、ただ日常の風景としてではなくSFをベースに書いた設定にしたところに好感が持てた。</li> <li>○京都を軍事都市だと断定する所など、異化的な部分が独特なユーモアにも繋がっていて面白かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○宇宙人ルララが京都という地名にとどまらず、様々な日本語の固有名詞をネイティブの感覚・価値観で当たり前のように使っていることへの違和感があった。</li> <li>○京都に限定する必然性は薄い。はじめに「京都ありき」の設定のようで、少し無理があるように思える。</li> <li>○折角SFなのだから、もっとアクシデントや想像し得ない展開を盛り込んでほしかった。</li> </ul>
京都の大学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「京都の大学生」という映画を撮る、その撮影シーンとオフショットを行き来するメタ的な構成で、工夫を凝らしている。</li> <li>○京都の場所や京都らしさがさりげなく取り入れられており、物語の中での必然性を持っていた。京都というテーマを生かすという点からも、本作の完成度は抜きん出ている。</li> <li>○様々な文学・音楽・映像作品からの引用を散りばめることで、それらに親しんだことのある読者や、それらが気になっている若い読者を惹きつけることに成功している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人気俳優という設定をあまり生かしきれていない気がした（外見やキャラクターの詳しい描写が欠けていた）。</li> <li>○ぐるりの「京都の大学生」という曲を聴いたことがない読者もいるので、歌詞を引用しても良いのかもしれない。</li> <li>○こじんまりまとまったライトでオシャレな読み物に終わっており、読後に余韻が残らなかった。</li> </ul>

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良く感じたところ
京都ボンバーレモン	<ul style="list-style-type: none"> <li>○幕末の人物が現代にタイムスリップしてくるだけではなく、実は漫画の主人公だったという二重構造になっている設定が面白かった。</li> <li>○幕末を舞台にしたり、マンガミュージアムを模した博物館の存在など、京都であることの必然性がある題材を選ばれている点が好印象だった。</li> <li>○殺陣のシーンなど緊迫感が漂うように丁寧に描写されている印象を受けた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○後半、主人公の正体が分かってからラストまでの展開が、淡々としていたのが物足りなかった。</li> <li>○登場人物が多すぎる。それぞれの説明も長く、話の展開自体も緩慢な気がする。</li> <li>○幕末の時代に関する知識のない読者にも分かるように、時代背景や人間関係の説明があると良いと思う。</li> </ul>
京都ミステリ RUN 殺意の匂い	<ul style="list-style-type: none"> <li>○息もつかせぬ展開が続き、読者を常に楽しませようとするエンタメ性がとてもよく伝わった。京都の町を舞台にした謎解きも面白く、とてもよく考えられたものと思った。</li> <li>○全体を通して飽きさせない、無理のないストーリー展開で、矛盾点などもなく、全体的に完成度が高い。</li> <li>○人物設定に関して、それぞれの人物に背景があり、様々な事情を抱えている点が、よく考えられている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ミステリーとしてこの作品を評価しても、犯行の動機の説得力の無さや細かな設定の粗雑さが目に付いた。</li> <li>○同じ事象を、視点人物を変えて数回取り上げているのはミステリーの常套手法である。</li> <li>○果たして、読後に読者の心に何か残るだろうか。深いところで共感、共鳴できるところがなかった。</li> </ul>
黒田辰秋 梵の刻	<ul style="list-style-type: none"> <li>○表現力、語彙力に優れていて、風景描写や心情描写に奥行きと趣がある。</li> <li>○数多くの文献にあたって事実や歴史をよく調査し、実在の人物に対して単に表面的ではない奥行きのある理解をしているためか、民芸に向き合う登場人物たちの語る言葉一つ一つに真実があり、重みがあると感じさせる。</li> <li>○民芸に携わる作り手たちの熱気や気迫、特に辰秋の民芸に打ち込むひたむきな熱意が、手仕事の細かい丁寧な描写によって浮き彫りにされている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自伝と考えれば、このエンディングで良いように思うが、主人公の後悔、屈託だけではない何かが見えてくると、作品に厚みが出るのではないか。</li> <li>○史実に忠実なため、少し地味な印象を受けるので、大胆な脚色を加えたり、それぞれの人物の性格、見た目などの設定をもっと作り込むと、人物が分かりやすくなって良いと思った。</li> <li>○読み始め、黒田辰秋を知らない者には話に入り込めない、読み進められない印象を受けた。</li> </ul>
虚空華(こくうげ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○登場人物同士が緻密に関わっていて、物語を進めるにあたって噛み合っていた。</li> <li>○スリリングな会話の場面など、場面ごとの書き込み方、描写がとても有効に機能しているように感じられた。</li> <li>○歴史小説を読み慣れていなくても、あまり止まらずに最後まで読むことができたし、作品の内容も頭に入ってきた。それだけ、力を持った作品だと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地の文が非常に長く、序盤から中盤にかけて会話が少ないので、物語として内容が硬く、各人物の心情を追いかけていくところがあつた。</li> <li>○ルビを振る、会話などでさりげなく難しい単語を説明する、注釈を付ける等、できる限りの工夫、努力は必要だと思う。</li> <li>○説明過多、説明的な文章が多い。また、会話で無理矢理、物語を進めようとしている。</li> </ul>
コバの光	<ul style="list-style-type: none"> <li>○姑棄野の老婆に関する昔話について、ただ引用するだけでなく主人公が自分なりの考察を試みている点と、冬眠との間につながりを見出している点が、オリジナリティを発揮しようという姿勢が垣間見える。</li> <li>○バイクに乗っているときの情景描写や臨場感の表現が上手く、主人公の心の動きも丁寧に表現されていた。</li> <li>○心に大きな傷を持つ主人公のゆっくりとした絶望への傾斜、声なき声というものが沁み出して来るような淡々とした文調で、衝撃的な大きな事故との対比としても上手く効果が出ていると思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○読者がパッと見て読んでみたいと思える、インパクトのあるタイトルにした方が良いと思う。</li> <li>○彼女との幸せな時間の描写がもっとあつた方が喪失感とのギャップを強く出せたと思う。</li> <li>○主人公の世界、考えが最初から最後まで閉じすぎているかなと思った。どこかに光なり、人情、心の叫び、人間臭い要素が現れ、もう少し直接的に主人公に影響する場面を見せた方が動きも出て、閉じたところがより浮き立つかなと感じた。</li> </ul>
今夜、祇園のバーで	<ul style="list-style-type: none"> <li>○構成力がある。非常に書き慣れた作者ではないだろうか。</li> <li>○出される酒とエピソードが上手くかみ合っているものもあり、バーを舞台にしている小説らしさがあった。</li> <li>○バーでの会話を中心に展開するが、話題の進み方、展開が豊富で、興味深く最後まで読み通すことが出来る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○上手ゆえ、読んでいて、物語そのものというより、作者が話したい(書きたい)エピソードを羅列されているような感じがしてしまった。</li> <li>○舞台は祇園のバーということになっているが、京都に絡ませたエピソードが少なく、京都らしさに欠ける印象だった。</li> <li>○どれか1話でも、もっと深掘りされて書かれたらと感じた。</li> </ul>

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
山紫水明	<ul style="list-style-type: none"> <li>○誰かに足りない点を他の誰かが補い、助け合う関係ができていて、それぞれが協力して問題解決に向かう物語構成・人物の相関関係がよくできている。</li> <li>○ストーリーも簡潔で分かりやすく、要素を盛り込みすぎずにすっきりした印象を受けた。語彙が全体的に優しい大和言葉が多用されているような印象を受け、世界観にマッチしていた。</li> <li>○丁寧に柔らかに繊細に織り込まれた情緒的文章に京都の匂い、風情が感じられた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内容は児童文学やファンタジーと形容できそうなので、もう少し柔らかい印象のタイトルにした方が良くもしい。</li> <li>○全体的にリアリティが乏しい。登場するキャラクターを人間以外の生物として設定するのならば、その細部や癖を描かなければ、読み手はあまり納得できないものである。</li> <li>○小説よりも他の形態（童話など）が向いているのではないかと思った。</li> </ul>
騒音ジャムセッション	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体を通してコロナ禍のストレス感や閉塞感がよく表現されていて、現代を感じさせる物語だった。</li> <li>○J a z z に用いられる楽器、スタンダード曲、演奏者などの情報が初心者にも分かるよう解説されていて、読み手への配慮が丁寧になされていたのが良かった。</li> <li>○信号機・救急車・サックス・ピアノ等、物語に音を感じる事の出来る完成度の高い作品だと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○抑圧的な母との確執、音楽家が聴力を失うことへの恐怖というのは、やや類型的。</li> <li>○音楽活動、騒音被害、鶴退治と、一作に様々な要素を盛り込みすぎて、却って散漫で冗長な印象を受けた。</li> <li>○騒音犯との攻防については何度も同じような状況が繰り返され、読者としてはストレスを感じた。</li> </ul>
その刀の煌めきは	<ul style="list-style-type: none"> <li>○月食をテーマにしたところは、何となく冒頭から妖しい雰囲気があり、話のつかみとしては良い。</li> <li>○戦闘シーンなど、表現の難しい部分も巧みな文章力で読者に伝わりやすく表現されており、小説としての文章力は確かだし、完成度は高いと思う。</li> <li>○怪奇もの的な妖しさは表現できていたと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○主な登場人物が全員大学生なので、もう少し書き分けるか減らしても良かったかもしれない。</li> <li>○語り手の視点にブレが多く、非常に違和感を覚える。</li> <li>○シリーズものを意識して書かれているようだが、この作品だけで完結するのなら、すっきりしない。</li> </ul>
高瀬川コンクリート	<ul style="list-style-type: none"> <li>○兄と妹、その他登場人物の心、気持ちの距離感が明確で、読んでいて深いところまで感じられた。兄の存在が（性格が）現実離れしているが、そこが魅力になっている。</li> <li>○作品の長さに対して多人数の登場人物が出てくるが、それぞれの人物を書き分けているのは素晴らしい。それも説明でなく会話や描写で、その人その人の性格や人となり伝わってくるのはすごい。</li> <li>○最初に読んだ時よりも、3～5回読んで（読み込んでいきたい魅力があった）更に評価は上がった。執筆力のある書き手だと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○なぜ子供を授かったのか、なぜ鯉にさらわれたのか、なぜあのタイミングだったのか、すべてが不可解だった。</li> <li>○物語を通じて何を描いていくかを明確に固めないまま本文を執筆した印象。</li> <li>○万人が理解し、万人受けする作品を書くことは無理だが、もう少し読者の気持ちを考え、配慮し、読者に親切な作品を書いてほしい。小説は読んでくれる読者があってこそのものである。</li> </ul>
チャイルド・ストーン	<ul style="list-style-type: none"> <li>○特殊詐欺の被害者と加害者、双方の立場を深く追求されていた。特に、特殊詐欺の加害者がなぜ詐欺をするに至ったのかという経緯や、確実に大金を払わせるための手口が詳細に書かれており、取材されたことを感じられた。</li> <li>○読み進めていくと、人物描写も良く、構成もしっかりと描かれている。読み応えのある作品だった。</li> <li>○事件があってからのそれぞれの人物の変化が丁寧に描かれていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体的に余計な描写、物語の脱線が多く、読みにくい内容だった。</li> <li>○まわりくどい言い回しや比喩が多く、脇道にそれることが多いのでテンポ感が失われているように感じる。</li> <li>○実際の人間の場面のリアリティをしっかりと書いてこそ、ファンタジーの場面が生きてきて、より作品の説得力、そして魅力が増すと思う。</li> </ul>
エイセイボーロ 鶴亀サブレ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○どの人物も語り言葉が自然。一面的ではない奥行きのある人間像だった。</li> <li>○理知的な文章の中にグッと感覚を呼び覚まされるような生々しい表現があり、読むことを身体的に経験させてくれる。</li> <li>○場面が進むにつれて微々たるものだが、人間関係も変化していき、作者の力量を感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○タイトルはもう少し内容を象徴するものが良かったのではないかと。</li> <li>○京都文学賞の舞台が観光名所や名刹が舞台である必要はないと思うが、「京都」や「亀岡」が本作品の中で生かされているだろうかと思った。</li> <li>○ラスト、もうワンシーンかエピソードがあった方が、余韻が深まるような気がした。</li> </ul>

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
天正初恋物語	<ul style="list-style-type: none"> <li>○一つではなく複数の「初恋」が鍵となって物語を形作っていく構成は上手かった</li> <li>○文章にけれんみがなく、端正で美しい。しかも淀みがないので読みやすかった。</li> <li>○時代劇特有の硬質な文体ではなく、とてもカジュアルな文体で描かれていて、従来の時代劇ファンではない層の読者に訴求する力があるかもしれないと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○タイトルにひねりがなく、ネタバレになっているのがもったいない。</li> <li>○登場人物のショートストーリーが集まった感じで、誰がメインの物語なのか分からなかった。</li> <li>○特定の人物については、もっと深層心理、感情の揺れに至るまで描いてほしい。</li> </ul>
和泉守兼定「西洞院劔」十一代 古川清右衛門伝	<ul style="list-style-type: none"> <li>○幕末の京都の動乱、混沌とした時代の雰囲気がよく表現されていた。時代背景等もよく調べられており、分かりやすくまとまっていた。</li> <li>○無駄なところがなくコンパクト。読み物として上手にまとまっていると思う。</li> <li>○近代化の波と西洋文化の流入が進む中で、刀匠としての生き様に苦悩しながら人生を送る名工に焦点を当てた物語はテーマとしてありがちでなく、面白い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○論語などの言葉、刀剣鍛冶師としての矜持、時代背景を生かしてドラマを掘り下げていけば、もっと奥行きのある作品になったと思う。</li> <li>○ハートマークを筆頭に、特に会話表現などに歴史的な風合いが感じられず、作品の世界観を壊している。</li> <li>○もう少し文章量が必要なのではないかと。ナレーション的な説明に頼りすぎていると思う。</li> </ul>
ねむいね	<ul style="list-style-type: none"> <li>○物語作りのワークショップの場面で、ストーリーの流れがスピードアップして興味が惹きつけられた。</li> <li>○小説全体の文体にセンスがあり、独特のリズムを感じた。描かれる世界が文体も相まって独特で、この世界に入り込んでみたいと思わせてくれた。</li> <li>○音楽や映像に造詣が深いことが文章力や表現力という部分で強みとなり、個性となっており、独自の世界観を持った作品となっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ときに表現がくどすぎるため、物語が停滞してしまっている。物語を前に進めないシーンは割愛するなどテンポを意識されるともっと良くなると思う。</li> <li>○京都という題材を上手く活用しきれていない。</li> <li>○作者の好きな音楽や映画、作詞家を読み手に押し付けているように感じてしまう。</li> </ul>
パステイッシュで あればこそ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○京都の描写も美しかった。大原・寂光院を訪れるまでや、五山送り火の描写は、実際に京都を訪れているような雰囲気に浸れた。出てくる京都に住む人も優しくおおらかに描写されていて、心地のよさを感じた。</li> <li>○文章が上手い。余計なことを書かず、できる限りそぎ落とし、リズム良く書こうという姿勢、気持ちが感じられる。</li> <li>○書き出しから作品本体の中へ読者を自然に導入する力が、書き慣れた上手さでプロの様だ。これから作品がどう展開するのかワクワクさせる。実に良い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○小説に限らず、文章を書く上で最も大切なことの1つである「何が言いたいのか」が読んでもよく分からなかった。</li> <li>○「パステイッシュ」という言葉はこの作品内で大きな意味を持っているのだろう。だが、一般に広く浸透している言葉ではなく、この言葉の意味、言葉が持つ雰囲気や感覚、印象などが、実感として全く湧いてこなくて分からない。</li> <li>○全体の印象として、高尚すぎて、一般の読者がついてこられない。読者を選ぶ作品だと感じた。</li> </ul>
百代の庭師	<ul style="list-style-type: none"> <li>○たくさんの文献資料にあたっていて、物語の時代背景や庭園、人物の描写などに説得力がある。</li> <li>○一見、史実や時代背景に忠実な物語と見えて、その中に自然な形で幻想的な場面が挿入され、しかもそこに違和感を抱かせないのは、作者の筆が巧みだからだと思う。</li> <li>○独特の味わいのある文章で、人物の語る言葉にも温かみや情感が滲み出ている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○造園のいう芸術と向かい合う植甚の芸術性や内面、苦悩が十分には書かれておらず、題材（小川治兵衛）が生かされていない。</li> <li>○会話の文体に馴染めなかった。会話の部分がこの作品の質を下げているように思う。</li> <li>○作品の中に知識を詰め込みすぎており、登場人物たちが身動きを取れなくなっている。特に、歴史の講釈は小説の流れを悪くしている。</li> </ul>
不足の正体	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ラストシーンまでにコロナ禍による鬱々とした日々の細かなエピソードを漏らさず丁寧に書くことで、多くの読者とも共有出来るコロナ禍という時代の空気を有効に活用し、ラストシーンの開放感へと繋げたところに、本作の一つの成功があるように感じた。</li> <li>○ちょっとした記述に作者のユーモアと文章のセンスを感じた。</li> <li>○会話と地の文とのバランスがちょうど良く、テンポ良く読むことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地の文一つひとつが非常に端的で浅く、特に心情描写が伝わりにくい。</li> <li>○ラストで大好きな詩人の詩を朗読するが、その詩を部分的でも良いから引用しても良いのではないかと感じた。</li> <li>○身辺雑記は純文学の王道だが、小説と随想のあいにあるような作品に思えた。小説としてももう少し捻りが欲しかった。</li> </ul>

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
ブラック・メサイア	<ul style="list-style-type: none"> <li>○多くの文献資料を渉猟し、緻密な考証の跡がうかがえる力作である。</li> <li>○題材についても、古代史については謎が多く、その謎を基に一つの仮説としての物語を編んでいくという意欲やその熱量に圧倒された。</li> <li>○文章力は相当に高い。個々の表現も巧みである。呼応関係がしっかりしているため、たくさんの読点で繋がれた長文でも存外読みやすかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体を通して作者の一人語り、ストーリーテリング的な部分が大きく、小説というより歴史書を読んでいるような印象を受けた。</li> <li>○難解な語句・漢字が多く、古代日本史を知っていることが前提とされる作品で、読む人を選ぶと思った。</li> <li>○ほとんど理解出来ず、最後まで読むこともとても大変だった。内容が良く分からなかった。</li> </ul>
偏差値72の恋	<ul style="list-style-type: none"> <li>○YouTubeやマッチングアプリ等、最近の話題も取り入れられており、今の時代に受け入れられやすい作品だと思った。</li> <li>○登場人物が多くも少なくもなく、性格付けがはっきりしていて、それぞれの関係性について把握しやすかった。</li> <li>○二人の主人公を中心に物語が展開する形式で、各章の末尾で謎や次章に引っ張る仕掛けが施されており、その謎を追って読み進めたいと先を読ませる引き込みが出来ていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ミステリー小説としては色々と無理があり、ツッコみどころ満載であった。作者はもう一度作品を丁寧に読んで、おかしなところを修正してから応募すべきであったと思う。</li> <li>○どこかで読んだことや見たことのあるような大味な展開がいかにも雑だと思った。</li> <li>○作者は登場人物と同様に京大に強い思い入れがあるのだろうが、それならもっと京大生の他大生とは違う個性（イメージではなく）を書かねば駄目だろう。</li> </ul>
僕は君と、嘘の世界に囲まれて。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○SNSや最先端技術に対する疑問やルッキズム、宗教問題やジェンダー問題など、昨今の社会問題を積極的に取り上げて、ストーリーに取り込んでいて、読んでいて興味を惹かれた。</li> <li>○なぜ舞台が近未来なのか、高校生2人の身の回り（社会）に対する違和感など、最初読者が疑問に感じるものがどんどん回収されていく構成の巧みさがあった。</li> <li>○感情表現や情景描写がよく描かれているなどと思った。登場人物たちの青春を楽しんでいる空気感が伝わってきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○舞台が京都である必要性を感じなかった。地元の地名はよく出てくるが、ストーリー自体には何も影響していなかったので、ただ地名を当てはめただけのように思えた。</li> <li>○二人が出会う場面や状況設定、会話の様子が近未来的でなく現代的なので、構成の時点でしっかりと設定をされた方が良い。</li> <li>○会話シーンを読んでいても本編と関係のない無駄な会話が多い。物語を前に進めるような会話シーンを心掛ける方が読み物として洗練されると思う。</li> </ul>
ミッドナイト・アラ・モード	<ul style="list-style-type: none"> <li>○京都の「夜の世界」を、そこで働く当事者視点で描こうとする作者の野心に好感を持った。</li> <li>○簡潔ですっきりとした文体であり、かつ表現のバリエーションが豊富な印象を受ける作品だった。</li> <li>○夜の世界の泥臭さ、シビアな人間関係がよく描かれていて臨場感にあふれていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○タイトルとストーリーが合っていないような気がする。</li> <li>○接客業を描いているのだから、登場人物の書き分けにもっと尽力した方が良い。</li> <li>○物語と京都との関わりが希薄。「京都」が浮かび上がらない。</li> </ul>